

「論理的原子論 (logical atomism)」とは耳慣れない言葉ですが、これはイギリスの哲学者であるバートランド・ラッセルが 1918 年から 1919 年にかけてケンブリッジ大学で行った講義の題名です。原子論(atomism)といえは、物質の構成要素である物理的実体を論じることである、と知っている人が多いでしょう。しかし、ギリシアやインドの古代原子論やアリストテレスの形而上学に立ち戻って考えてみますと、原子の概念は、現代物理学における素粒子のような窮極の物質的実体であるというよりは「個々の生命体というシステム」を含むより広い概念だったということに気づきます。現代へ至る原子論成立の歴史をたどってみますと、ライプニッツのモノドロジーを例とするように、古代の原子論やアリストテレスの形而上学の、近代科学の成果に基づく「読み代え」が行われているらしいことにも気づきます。さらに、20 世紀の初頭には、ボルツマンの分子運動論をはじめとする現代原子論にたいしては、原子論とは単に仮説された形而上学的実体にすぎないのであり、物理学者の根も葉もない空想である、というマッハをはじめとする認識論からする強烈な批判が多々あったことにも気づきます。こうした現代科学技術を取りまく状況を背景として登場したのが論理的原子論であり、ここにこそ現代科学技術とりわけシステム医科学という最新の科学技術分野に課せられた諸問題を解く鍵があるかもしれません。

論理(logic)とは、ギリシア語のロゴスから由来しますが、ロゴスとはコトバのことであって、論理的原子論は、世の中の事物が原子の集まりと空虚な空間のみから成り立っているという原子論を、物質の世界だけでなく言葉の世界にも適用しようとする試みの一つです。古代から現代へ続くそうした試みを紹介しながら、論理的原子論とは、現代の生命論や医科学の分野においても、私たちに科学的な「モノ・コトの見かた」や論理的な「モノ・コトの考えかた」を教えてくれる基礎的な理論であることを明らかにし、そのシステム医科学への応用を試みるのがこの小論です。